

## 感性を育んだ少女時代 韓国「木浦」と鷹巣

辻さんは、昭和9年、日本の植民地時代の朝鮮・木浦府に生まれました。祖父善右衛門が木浦に大きな農場を持ち、歯科医だった父・石上新一氏も有力者として安定した生活を送っていたようです。しかし、4歳の頃、子どもの死病として恐れられた疫病にかかり、父が奔走して手に入れた特効薬で助かったものの、薬の後遺症で虚弱な体質になってしまいます。

木浦では、韓国人少年が使用人として住み込み、辻さんの世話をしながら、ときには国語の先生になりました。また、この頃は生活が豊かだったため、家や隣人宅にあった絵本や児童書で、さまざまな知識を吸収しました。

父新一氏の姓「石上」は、大和（奈良）の石上神宮にゆかりを持つ養母の姓で、新一氏は日本歯学会の草分けとしても知られ、考古学などにも明るい方でした。

鷹巣時代は、鷹巣農林高校の考古学の指導者として陣場岱や大野台、大湯など発掘調査を行っており、当時の出土品が辻さんを介し、旧鷹巣町に寄贈されています。



母・石上ミサヲさん  
(1903-1987)

当時、鷹巣農林高校で被服科の教師をしていた頃の母・ミサヲさん。結婚する前、昭和初期にも一度鷹巣実科高等女学校の教壇に立っている。兄・平助が守っていた阿仁の実家は豪農で、出入りしていたフランス人女性から西洋料理を習ったという。

### ▲鷹巣国民学校に転入学した頃（昭和21年）

2列目右端が辻さん。中央が担任の寺田ヤシ先生。「源氏物語」を原典で読むなど読書好きで、学校では友人から借りた「少女の友」や「ひまわり」など、当時人気の少女雑誌をよく見ていたという。



### 高校2年、運動会での仮装行列（前列中央）▶

級友たちと佐々木小次郎を演ずる（昭和26年）。宝塚が好きで、よく自分のアイデアで宝塚風の演出などしていたという。

宝塚の情報源は雑誌とラジオ。ラジオで宝塚の番組が放送される時間になると、冬でも電気屋の前に立ち、友人の角巻きに入りながら、放送が終わるまで聞いていた、と述べている。

この頃、鷹巣農林は「北方文芸」を発刊された佐藤有次郎氏（ペンネーム「鉄章」）や三日尻吉忠氏（ペンネーム「三樹茂」）など文芸活動に秀でた教師にも恵まれており、その文学的土壤の中で、ますます才能が磨かれたと思われる。



## 刊行された主な辻作品

### ●「虹のファンタジー」

昭和51年・新日本出版社

宝塚ファンの著者が、昭和50年代のトップスター宝塚の魅力について語った「宝塚譜歌」。古今東西の名作や映画との比較など引用資料も多く、研究書的な色彩が濃い。



また、この中には自伝的小説として短編小説「りんごの花咲く頃」が収められている。

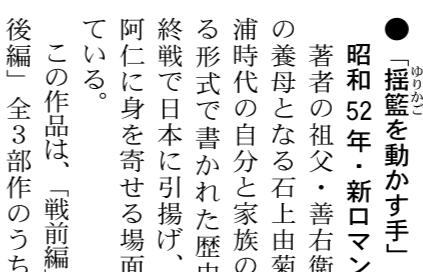
### ●「無窮花を知らないなかつた頃」

平成7年・世界日報社

木浦での12年間の回想記。戦時中から日本に引揚げるまでを、當時幼かつた著者の視点で描く。



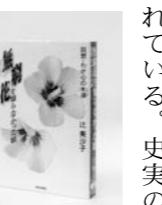
当時、20万部のベストセラーとなつた作品。



●「ゆりかこ 摆籃を動かす手」  
著者の祖父・善右衛門と愛人で父の養母となる石上由菊の生涯や、木浦時代の自分と家族の記憶を回想する形式で書かれた歴史小説的作品。終戦で日本に引揚げ、母のふるさと阿仁に身を寄せる場面が序章となっています。

この作品は、「戦前編」「戦中編」「戦後編」全3部作のうち、明治から第2次大戦が勃発するまで「戦前編」と題名まで決まっていました。

しかし平成11年、作家としては成熟期に入る66歳で帰らぬ人となりました。



この作品は、「戦前編」「戦中編」「戦後編」全3部作のうち、明治から第2次大戦が勃発するまで「戦前編」として書かれたもの。



当時、20万部のベストセラーとなつた作品。

### ●「さよなら鳳蘭、鳳蘭物語」

昭和54年・権書房

宝塚ファンの著者が、昭和50年代のトップスター鳳蘭の舞台「虞美人」を見てから彼女のとりこになりながら、宝塚の魅力について語った「宝塚譜歌」。古今東西の名作や映画との比較など引用資料も多く、研究書的な色彩が濃い。



また、この中には自伝的小説として短編小説「りんごの花咲く頃」が収められている。